佳作

わたしの大じな友だち

愛知県　岡崎市立上地小学校二年　川澄　梓

わたしが一年生からかよう学どうクラブには、ずっとなかよしの友だちがいます。まい日二人で工作をしたり、絵をかいたり、いっしょにあそぶのがとてもたのしくて、わたしは、その友だちのことが大すきです。

ところがある日友だちとあそぶことができなくなってしまいました。友だちにべつの友だちができたからです。

友だちは、あたらしくできた友だちと二人であそぶようになり、わたしは、一人ぼっちになってしまいました。まい日たのしかった学どうクラブが、すごくさみしいものになってしまいました。

それでも、学どうクラブには、まい日行かなければいけません。あそぶ友だちのいなくなったわたしは、ひたすら学校のしゅくだいをすすめていました。

ある日、いつもと同じようにしゅくだいをするためのばしょをさがしていると、べつの友だちと二人であそぶ友だちを見つけました。すこしさみしいきもちになりながら、二人がけのばしょが一つだけ空いているのを見つけましたが、いままで話をしたことのない、こう学年のおねえさんがとなりをつかっていました。ゆう気を出して、

「いっしょにすわってもいい？」

と聞くとおねえさんはにこっとわらって、

「いいよ！名前は何ていうの？」

とこたえてくれました。すきなあそびや、きゅうしょくの話をしているうちに、いつの間にかさびしい気もちをわすれていました。

つぎの日も一人でマンガの目をかくれんしゅうをしていると、

「いっしょにかこうよ！」

と上手な目のかき方をおしえてくれたり、またつぎの日には、

「きょうは、目だけじゃなくて、体もかいてみようよ。」

とあたらしいことをおしえてくれました。

いつの間にか、あんなにさみしかったのがうそみたいに、学どうクラブに行くのがすごくたのしみになっていました。

もし、おねえさんが話しかけてくれなかったら、まだわたしは、さびしい気もちのままだったかもしれません。もし、これからわたしと同じように、さびしい思いをしている友だちがいたらこんどはわたしがおねえさんと同じように、話しかけてえがおにしてあげたいと思います。